

## A群溶血性レンサ球菌感染症（溶連菌感染症）について

### — 済生会中津病院からの感染症情報 —

A群溶血性レンサ球菌感染症（一般には溶連菌感染症と言われる場合が多いです）は、A群溶血性レンサ球菌によって引き起こされる感染症です。この感染症は、菌の侵入部位や組織によって多彩な症状を引き起こすことが知られていて、時には稀ではあるものの発症機序がまだ不明で生命に関わる劇症型溶血性レンサ球菌感染症の原因となることもあります。しかしここでは、主に小児の間で流行し、最も発症者数の多いA群溶血性レンサ球菌咽頭炎（大半の方々は溶連菌感染症というこの咽頭炎のみをイメージすると思います）について記述させていただきます。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、日本を含めた温帯地域を中心に広く世界的に分布している感染症です。感染経路は主にヒトからヒトへの飛沫感染ですが、接触感染もあります。潜伏期間は2～5日であり、突然の発熱、咽頭痛、全身倦怠感によって発症し、しばしば嘔吐を伴います。通常発熱は3～5日以内に下がり、主な症状は1週間以内に消失する予後良好の疾患ですが、溶連菌が産生する毒素に免疫のない場合は猩紅熱（しょうこうねつ）に発展する場合があります。

治療として抗菌薬の投与が行われます。ペニシリン系が第一選択ですが、ペニシリンにアレルギーがある場合にはマクロライド系等の他の抗菌薬が用いられています。リウマチ熱や急性糸球体腎炎などの合併症を予防するために、少なくとも10日間は確実に投与する必要があります。

予防としては、患者との濃厚接触を避けることが最も重要です。また、マスクを用いた咳エチケット（咳やくしゃみを発する者が周囲への感染予防のためにマスクを着用すること）や手洗いなどの一般的な予防法も効果が期待できます。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の発生報告数は例年学校、幼稚園等の春期休暇の終了後に増加し、ゴールデンウィーク期間中に一旦減少がみられるものの、その後再び増加し、5月下旬から6月頃に流行のピークを迎える場合が多いです。6月はA群溶血性レンサ球菌咽頭炎に注意が必要です。

2014年6月4日

大阪府済生会中津病院ICT

安井 良則